

◆◆◆◆◆
雨の日の独り言
◆◆◆◆◆

上坂元 絵里

雨の多い一年だった。九月のある日、雨上がりの午後、庭そうじをしている私の耳に近くの学校のプール指導の拡声器の音が飛び込んでくる。保育後の余韻の中でその日をふりかえるひととき、否応なく響く大きな音に、何か鈍化されたものを感じる。

都会の生活、限られた空間で暮らす子ども達にとって幼稚園の生活は、ある種の発散の場となっている事は否めない。雨の日、保育が終わると多重的な音の中で過ごした、ぼっかりした残響を感じる。外へ出られず保育室へ閉じ込められた子ども達は、いつもよりも声高に遊ぶ。三歳・四歳の子ども達が始めて幼稚園・保育園という集団と出会った時、あの騒々しさをどう受けとめるのだろうか。力には力を、でつ

いつい声を張り上げてしまっただけれど、本棚の隅で一人、絵本を眺める子、黙々と絵を描く子に、各々の生活を保証してあげたいと願うこの頃だ。

大声を張り上げる子どもたちのパワー、伸びやかさは大切にしてあげたい。けれども、それ故、集団の場は喧嘩なのは当たり前でマイクを使えば解決できると考えるのは少し違うように思う。

雨の日、保育室のガラス越しに子ども達と園庭を眺めるほんの一瞬が私は好きだ。雨の降り方はいろいろで様々な音がする。お庭へ出たくて仕方がない子ども目の目に雨のお庭はどんな風に映るのだろうか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)